法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

納紗布日誌

松浦，武四郎

(発行年 / Year)
1860

紡紗布日誌

全

東西蝦夷山川
地理取調記行

納紗希日誌

多楽走樓蔵板

陸奥国遠田郡
涌谷村
加藤平人

凡例

一納紗希ハ昔ハ[illegible]と云ひしが今は[illegible]と唱ふ[illegible]則ち岬の側にして[illegible]厚清[illegible]去[illegible]銭[illegible]五十七[illegible]根諸去[illegible]銭[illegible]八里[illegible]

[illegible]海岸通りに陸路あり[illegible]今の路[illegible]切開さるゝ[illegible]

者[illegible]風土の大意を知る人[illegible]地名[illegible]

[illegible]深[illegible]余[illegible]地[illegible]

[illegible]厚清[illegible]舟[illegible]キイタップ[illegible]陸[illegible]ハナサキ納紗希[illegible]巡り[illegible]根室[illegible]

[illegible]銭[illegible]今其要を[illegible]

一此巻の書[illegible]地名を番[illegible]其[illegible]

及ぶもの多し国名の知れざるもの多し中略

大小川澤灣岬　岳所平有無岩石沿

等の字多し無き字は省略者は故今略疎漏多し

一譯のうち草木鳥獸等は考究すべき者多し他日改正

図會刻近撰救荒法近刻版載刊蒙図彙刻等に

見るべきものは出来るまで二三年を限り近刻の三部撰ずべし

志ある地の人の望みあらば原稿三卷を熟讀すべし

嘉永元戊申仲秋　於下谷二長町金澤屋の門右衛門重鎮著明盈

源弘誌

戊午紀事日誌

伊勢　松浦竹四郎著

東邊扼喉之要險北門鎖鑰之樞港厚岸為第一泊津矣下畧鎮守社額裏文

とゝ唐を南面して西に向ふ　センポウシクリ　と對し港口に島ありて船舶を繫ぐ

海山のけしき　此海を後にあつけ　ものなけれ

厚岸の名産　海の魚　海の貝　海の草　海の獣　海の鳥　海の虫

木皮類　アツニケウレ　皮剝ウレあり　を樹　楡　蓍根　松一枝の類

ものの後に　名　アツニケウレ　皮剝ウレ　を樹　楡　蓍根　松一枝の類

住ものは　是　なくは　匂芝木皮可績為布出陸川縣大明統志　草木可衣

者曰古服績其皮者有匂芝布紅蕉布弱錫明廊港若赤雅　匂芝木其皮可績

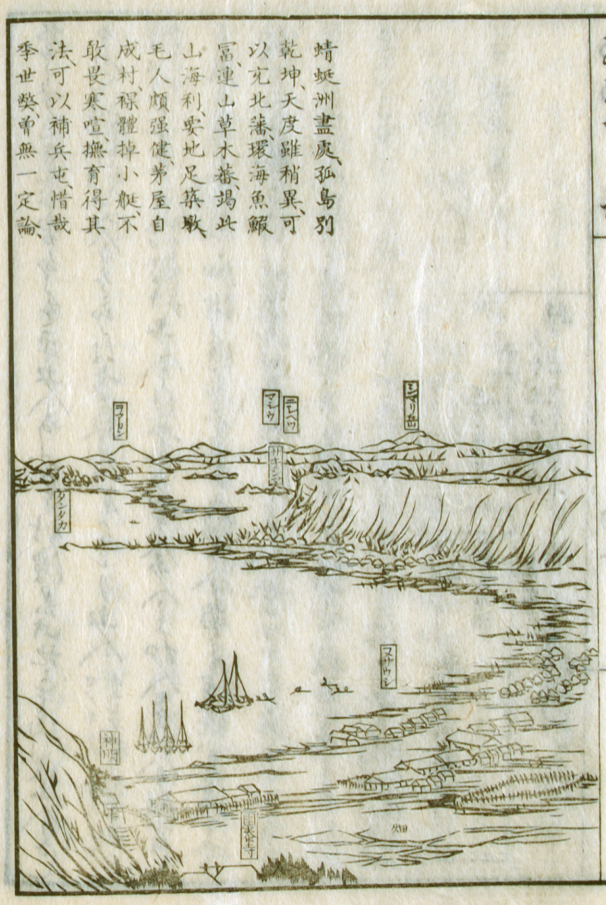
為布 粤西偶記 ヲ用ヒ何人今雪所 通行屋 勘番所 制札 備米蔵 合薬蔵 船蔵 鍛冶屋 大示屋 廐 板蔵九棟 茅蔵三棟
の方ヲ他は西方ヲ又ヌサウレ トマリトヽヱ 船泊りの義 ヽヽて立人山海の神奉ライナヲ エナホ
ヽヽ別掛ヲ多く刈取ヌサは幣ウレは包シヌサ初穂ヲ山地殘ラ
ヽヽ〳〵 諏訪縁記 ホ木を刈り幣帛の如くヽヽ天高市比賣の祭ヲ
地て本邦の幣帛ヲ実ヲ生ヽヽ 懐園記 イナホと称ヌシヤと称 此二ツ
の上紫麦を上と称 イナホは稗種の新穂 京都関東の米多ヽ麦を貨白
放ホて稗種の新穂糞壌を建 五穀豊饒の祈り是をイナホと称 此ヲ
大古の米と云ふ 此ヲ稗ヲ作りてイナホとイナヲと称 構る
やまヽヌシヤとヽヽは厚ヽ多きヽヽヌサの新穂ヽヽと本麻の新穂 此稗
種と麻の二つは本邦ヽヽも今の世ヽは新穂ヽヽ用ヽ思ひ

なきれ伊ヽヽ天地の神ヽ多ヽ為設ヽ物ヽヽ用ヽヽは用ヽ今の幣
帛ヽ今ヽ紙麻ヽ用ヽ上古の時紙麻ヽ用ヽ為ヽ時ヽ木のヽヽ
幣ヽヽヽ知ヽヽ器 稗種ヽ供ヽ為ヽ初種ヽ
初種ヽ刈ヽ用ヽ此麦穀小豆の初穂 稗ヽ用ヽ
棒又花 儀礼 別掛 武ヽ用ヽ別掛ヽ紙麻ヽ
ヽ上ヽヽヽ夫ヽ筑波祢尓由伎可母布良留伊奈乎可母加奈
思吉児呂我尓努保佐流可母又 安比見氐波千等世夜伊奴流伊奈乎加母
安礼也思加毛布伎美末知我氐尓 我 憶 村 曰此イナヲを嬬恋地ヽヽイナ
ヲと同じヽヽ強ヽ稗ヽ波地のイナヲも 行麻の義ヽヽ 嬬恋
園記 稗種の新穂ヽヽヽヽ 因ヽ麻を引ヽ時の弦の義と愛

又鬱をレテと呼ぶ麻ヲンタラシなる名目を知れるかり
の義なり　又　又サウレ　又サレヤン　エナウシ
絲を第機を即タ　此地和名抄に国名ヲ　此地は
こまの昆布きりの鱠飯等海産は鯨羽毛尾鰭骨歯は
此の名人は近江滅ぶ文化六年改元ありし
年墨江國泰寺陸奥の国にあり　長サ三尺九寸巾
文化元年五月八佛供養の開基文和四年
世を及了　此島はけふいつるを鶴の山風のきかんん
神明社寛文元年最上常陸建立　相殿稲荷
誠信二大夫　文化元年

サン丸ヶ山ヶ云其山頗圓平ナル故ニ号ヒシ也名義奥樞の義ヒ近比竹澤右衛門ヒ
道を開き二箇の木阿を建る　盤螺山、夷言取魚樋之義、蓋謂山頂區平也、
其地臨熟消湾、西望阿漢舍利諸山、紫翠如
新涛、與波光映帶真勝也、初喜多野竹澤臨此地也、以私費多募夷民、
剪草莱闢榛蕪、造磴道千餘級、以使登覽夷民等樂為之不日而成下累
其眺望華の及ぶ所ヒ遠く余も亦ヒ南望ヒ山の平ヒ望ヒキイタブ近ク
百チロフ　大ロモチロフ　小ロ二ツの沼ヒ口戦ヒ敷き板ヒ舟ヒ浮ヒ
ヒ平ヒ屋ヒ連ヒ　金ヒ金ヒ印ヒ　雨和岩ヒ右ヒ　沼ヒ
望國風流ヒ　山酒ヒ云ヒ　大金ヒ　又サンケドモヒ
取ヒ　ヒ　ヒ　

蜻蜓洲盡處、孤島列
乾坤、天度雖稍異、可
以充北藩、環海魚鰕
富、連山草木蕃、竭此
山海利、要地足築壘、
毛人頗强健、茅屋自
成村、稼穡掉小艇、不
敢畏寒喧、撫育得其
法、可以補兵屯、惜哉
季世弊、帝無一定論、



賈豎圖其利、空勞志
士魂、惟我有所見、建
策陳迂言、非速改舊
習、全島已保存、偏恐
千歲後、或為鯨鯢吞、
丙辰初巡視
有感作

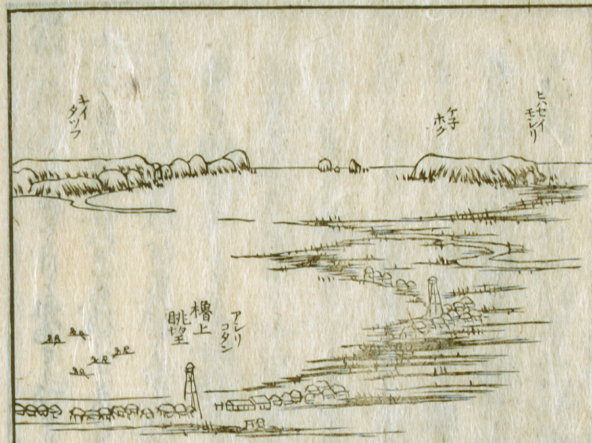
内山良隆

ヒヲツキニ云ヒアツケシの説と云て敵を逸遁のせんかたなりかを蓋ヲヤコツと云
有中ヲヨコの木の枝を刺毒と云ふ今一国隠の大小ゝ成て生長七四國面に多
そなわれはなの枝は当小城の祝家賀人の枝ホ云ふ有は
長しちも是ハ英雄の志つる有むと思ふ

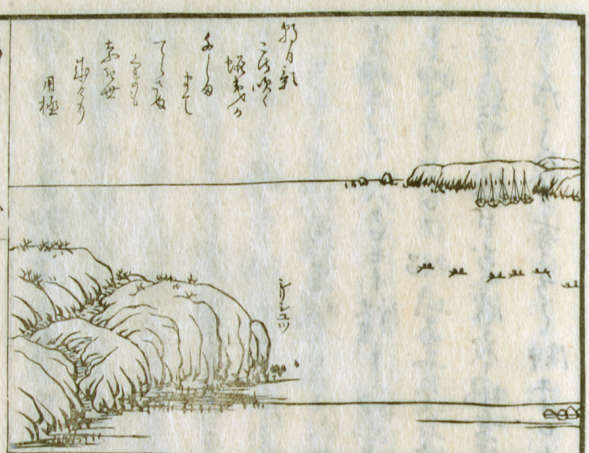
天賢之備りし者の子孫と聞て剛毒気強の者あり近世時代人物
傳に考ヘ

冒頭日月桜明治海軍中佐シユマビラ平岩城と云る所是ハバサンの下りて
見やヲチヨツヲロレヨフ 港を湾考さの義アイカツプ 大岩 岬こふ岩水の義
注 元戦の時代岬の上より軍場を望みて弓を射て敵を討
依て是と 山ふゼホウ と対ツクレコエ 岩 賀 窪 ある所と云義と エニンカツプ アイカツプ の義と是
大多岩 岬 と 平磯 ツ さ トウコダン 小川上 沿所 と云義 の 脚
中 宮 目 多 ゝ インカルウシ 小 岬 目 平 ゝ の義 山ふ ゝ ハ 多 人 多
故 是 ゝ 也 目 て キミセシユマ 磯 山 岩 怪 岩 恠 弁 ゝ 頭 ゝ

怒視盤龍の形實を目を驚せり ヒリカヲタ 川 岩 海 ゝ の義 ゝ
小 面 ヒリカ ヲタ 八 ア 国 ハ 上 旨 岩 磯 ゝ て 高 岩 磯 ゝ ゝ 赤 物 輝 の 磯 川 の 一 面 ゝ ゝ
大島 ヒロモリ ヒリカ ヲタ ハ ア 国 ハ 上 旨 岩 磯 ゝ て 高 岩 磯 ゝ ゝ 大 里 島 ゝ ゝ 東 面 ゝ ラツコイシヨ 岬 芋 嶽 虎 ゝ
ゝ 也 仇 て 是 ゝ シユラマイ 小 鍋 ゝ ゝ 義 注 古 社 の 鍋 ゝ 有 ゝ ホヌ ゝ シ ホ 川 ゝ
ゝ 去 ゝ 義 ウリルイムイ 西 岬 海 面 鶏 ゝ あ ゝ ゝ チコンキル 岩 磯 ゝ ゝ
岩 身 を 窮 め 面 ゝ ゝ 是 山 ホ ヨ 大 岩 岩 ゝ 近 ゝ 氏 ゝ 同 ヨ 柵 を
結 て 人 を 入 ゝ 拒 陵 ゝ 中 ゝ 石 録 乳 ゝ ゝ 体 也 深 ゝ 去 ゝ 石 ゝ 所 て
ムカイサカイマフ 岩 賀 岩 面 岸 ゝ ゝ 男 ゝ 歳 故 是 ゝ ヨン子サカイマフ 岩 国 ゝ
大 岩 故 是 ゝ 山 ホ シ レ ハ セホウシ 後 の 岬 と 対 ゝ て 国 波 穏 ゝ て 船 ゝ 空 ゝ 異 和
山 港 を 隔 て 内 和 ゝ 寛 ゝ 八 年 寛 政 ハ の 度 康 ゝ 帰 録 ゝ ゝ

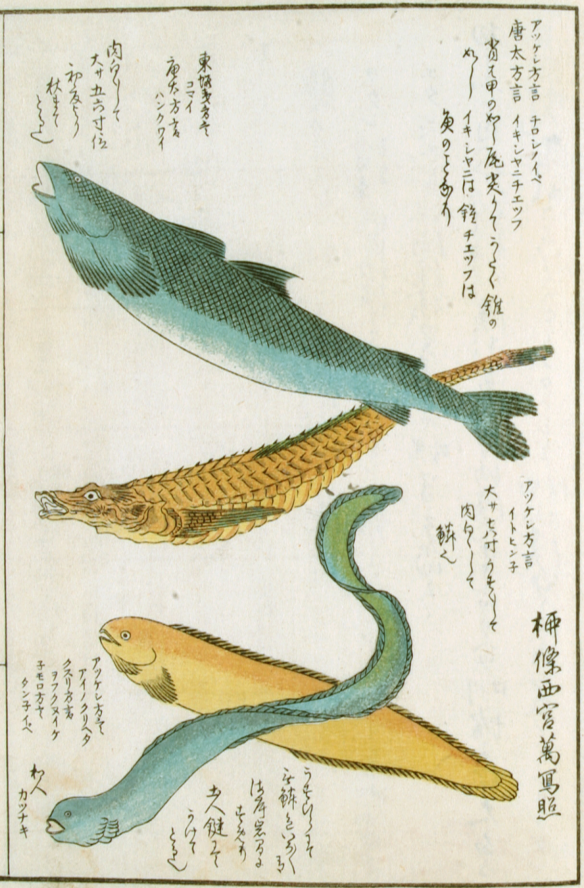


さてフクシヤタウシ（苫葱）取多きの地故多く見出す人の喰料（ねぎらアイハカマ わるい行者多くの人）或言ふ キトムの山邊よりも出る金坑の間坑所ら山山を掘ること日夜喰て嘗の濃れ主人の宵の夕の擬（ケイ）ケ所を照窓を穿て内の内公儀の山根より「西人山蒜（ノビル）多く生レタリ是當二其土地金銀鑛有モノ伝證ナリ野作雑記説と為て金を分る地と葱の新張く出るとも苦し佐渡の出三河内ら



新潟より葱を賣る船を新潟と称ス根ら所金を見出すもの根の土を掘て大利を得故を葱の来所ら成よ彼地と洗て新潟ハ唯男人ら多り流石金の多き地故多くを蒙て彼地ら流る陶冶ら成る所金を用きたりと之り附ても海岸を新潟多き多知ると過てホヌマベツ小駿毛の多き水藻ら多きマヒロ小

潮ニ義ホシマヒロ湾小須ト義ヲロクン子ムイ湾大晴き湾しの義ハ岸壁
立ニ為ク晴き板ヨ号ク　イレコチセンベ磯号ク軟くの内磯ヲ板ヨ号ク
岬ヒトカウレムイ湾見ル深き湾ヲ松夕陽ヲ見ル板ヨ号ク岬ヒトリ
ルロ二義高ク平ク　ヒヒ平山岩平ヨタシ子クツ岩ヒトリ長ク常ヒ引ク前ヲ出リノツケ
アトイ岬ヒトリ大ク順ノ如ク沖ヲ出ル板ヨ号ク　ヒヒ沒沼長ク前ヲ
ヒシ子イレヨ　ヒヒ子周ヲ岩磯ヒシ子ハ腦腦ヒヒ子ヲ出ル板ヨ号ク
岩岬ヒトリ　レハクロモイ湾大ク岬ヒトリ　ヒヒ子ハ辛モチロフ　川ヒヒ上沼ヒヒ番ヒヒ頭ヒ田
ヒ岬ヒトリ　レチロフ　口　沼　山ヒヒ高ク平ヒヒ時ヒ出ヒ岸ヒヒ陸ヒヒ出ヒ水ヒヒ口ヒヒ山ヒヒ川
ヒヒ岸ヒヒ岸ヒヒ　ヒヒ湾ヒヒ　ヒヒ風ヒヒ来ヒヒ口　ヒヒ山ヒヒ住ヒヒ蔵ヒヒ　ヒヒ嫌ヒヒ取ヒヒ茅ヒヒ屋ヒヒ
ヒヒ屋ヒヒ　ヒヒ故ヒヒ有ヒヒ号ク　ヒヒ平ヒヒ　ヒヒ上ヒヒ　ヒヒ岬ヒヒ
ヒヒ　ヒヒ　ヒヒ　



梅像西宮萬寫照

こゝに山裏のこを拾ひ得るのみ　彼は獣を捕ふ事を業とせず　探りとり山産を
窮め尽す者なり　彼裏は黄油の裏　余情なる人事　黄油を好く
風を察する附も明らかに祥を齎す者なり　余人黄油の裏と
言ふも大抵の者は是を知らざるなり　汚穢なるものゆゑ云ふ事を敢へて
敢へて　山中を閲歴する人　一種の硫黄を帯れり　子ーランド
マルテル　之フマルタ　「マルテリエス」及ホイナ」ト名ク　此獣形ノ猫ニ似テ足指ハ短ナリ
○茲ニ両種有也　一ハ脂モ毛カ黒ク黄ニ光有テ尾ハ白ク　今一ハ野生テ美麗ノ柔毛ニテ
頭ハ黄ナリ　此屎ノ香ハ麝ト同シ　ホイナ　いたく決して捕ふホイナとは美言ホイヌの訛なり　山地
山畑ともに　海辺は西小の方多し　拾の難く　好て山畑と海辺に次ぐ
元小地　黄油と称す　黄油と称す者は　地産の者なり　即ち地産者を指せるの説なり
糞を　起りて　一種の小獣を　捕へ　糞の出ずる所を附さるべし

花の実のあるかたちのを見かけてむかしの義本はさんとも指人

エモコモイ 同ニ ナヨテ 芋は多り今を陸続さう成より多メヨクル大ニ 岩 テモイ ニ 岩

少くもてケ子ホク 成 依ニ 多ケ子ホクニ云 赤揚多き故年しテ

ブレワタラ 同ニテ 山岩とケ子ホクの乃ち成 融入るや近頃内ニ成ずりまきあるる

キイタップ 用ニ二て 海ニ子ア 多ニ成ニテ赤花ら 名義上通平ニ子ア 多ニ萩ア ニ義ニ又 稜ア 涌し

故年有ニ ニ ハエキレヤニ 大ニ 岩ア ニ云 南ニ 旦ア トウブツ 南方 小ニ レレト工 岬東

ヨクレ 少分者 岩ア 山ニ 西ニ 海ニ てアシリコタンと 対して 船ア 成ニ 年ア 海中ニ

エタンベエレヨ 岩ア 成 あ ニ 海ニ 義の義ニ グヤ 岩ア 成 多ニ 西ニ ら

初ニ 和ニ 内ニ 入て 左ホキヤリ ツ 右キイタップ 海ニ 开ニ 東ア 西ニ 真ア 海ニ ホキレヤリ ヘツ 口 城ア 浦ニ 大ア 多ニ

貝 ホツキ 見 碁 ア 有 故ニ 年ア ニ くニ て ヨタノレケ 砂ア 海ニ 中ニ ニ 義ニ 義ニ とアシリコタン

ニ云 碁 ア 四 株 板 義ニ 株 義 義ニ 年ア ニ 年ア ニ 社ニ 株 見 対 城 和ニ ニ 義ニ 真ア 英ア 義ニ 建ニ 先ニ 科の ア 根 ア

法ニ 角ア 和ニ 年ア ニ 時 彼 地ア 乃ち ア 多ニ て 対ア ア 船 接ア ア 中ア て 近

比ニ ニ 子モロの 接ア 船ア キイタ ア ア ア 伸ア 只 願ア ア 多ニ ア ニ 今ア ニ 長 帳

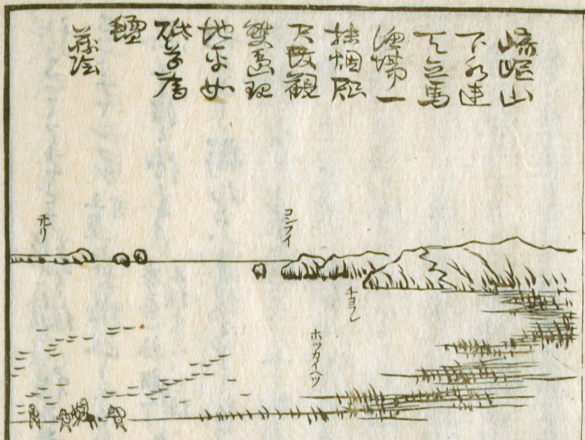
西ア ニ 貯ア 多ニ ア 山ニ 逃 鵜 鵜 鵜 コマイ ア ア 稼ア ニ ア サル ア 人ア ア ア ニ 地

形 南ア 西ア 海ア ア 義ニ 地ア ニ ア 西ア 上ア 平ア 山ア 桃ア 本ア ニ 褐ア 深ア ニ ア 形ア ア 半

ニ ア ア ア

勝手ものまた異なるを別て里巷毋志沼蘭と笑ふ多くは（エトピリカ）
（あ巻毒ヨ　ヤエトピリカ　大島　大さ鴨の如くもあり　背黒く　背白く　嘴紫紅色）　ヨン子チカプ　住て有
を除る島には特産有　キウリ、ヲレタラ、ツリヤ、フーラットリ、カ、キヨ、フウセチリ、
コロカツクル、ハリケウ、アチユイチカス、ワウス、レラルツ、イツラ、
ヒレカ、イトクトキ、アイスヒラリ、ヲマシルイチリ、ウエレユツス、ハケクレ子、ウエチリラキ、
ヌツフカチレフ、ホツキウレ、ウツセトイタ、ヲウヒケヒケ、ヲルレアツケウ、ハイトツフ、アラリ、
ヘカチリ、ヤウレタラ、ホヌチリレラテキ、ツラ、コベツチヤ、ま、陸て異を　フウレチカプ　大き鴉　赤島
背黒く少し嘴紫紅色　丸き　サルマシレコ　色白く　頭に有　ヤウ　地　アツケレイ、トコ　原角ふ
物を作るわ人の丸ときか　ヤウ　ホンく　鈴を　叩くめく　鳴らすく　レイレヤリタマヤリ　大ウ　鳥のめく　除
ときの丸と　カ子タ、キ　わ陸と　ホンく　鈴を　叩くめく　鳴らすく
寄る者中ゆ者を　べきこと　敵　夕方陸に馬を足ら来る
廿二日宿を移陽　公泥泊異界を　ヲ泊候ナヨリレエツ岬　九彩ヒ　山上を越て　依て
ヒ下ヲツベキレエイ岬　往古地者と　家の人　お　陸れ　由て　ヒ　く　ノコヘ
リヘツより

ヒ下く
ヒ下る　てアチヤビラ　考や二　標板　第　ヒ　ヒ　標　往古　人（家を　的　て　ヒ　と　射　ヒ　り　故　ヒ
ヒて　チヤシレコツ　土墨　有　古の　塚　泳　と　ヒ　の　有　ルイラン　板　ヒ　坂　ヒ　ヒ　ヒ　義　下　ホロト
ウ小　上　泥　ヒ　依　ヒ　く　考　墨　二　標　板　了　考　ヒ　て　ホンホロトウ小　越　て　平
山　上　ヒ　擬　板　不　来　場　ま　ま　吉　利　よ　板　本州　一　面　ま　ヒ　り　下　ブユウン
チン　岬　大　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　依　ヒ　く　上　ヒ　ヒ　蓮　華　の　大　さ　一　人　除　の　ヒ　ま　ま　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ま　ま　ま　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ



エチヤントロ川小川山ホロと岩ホロ岩ホロより
ヲヤカ大小ホロ船を走りしるを拾ひ引
小川二ツ越て南向ウレ、ヘツ小ヲ蕨
ムきろ坂ホロ坂ホロ岩
壁をトミチフラムイ小ホロの船ホロと
義りヨワタラウレ小ホロ方岩岬
の上をもりアフタウレ小ホロ両岬を大岩
壁ホロ義鎖ホロの義又坂ホロ越りヨフ
子プ小ホロ小ホロ拓検ホロ子の義岩岬越て
チレヤレラエツフ小ホロ立ホロ

天借巨霊手
槌開一面窓試
里千里外駭浪
響深し
松園道人

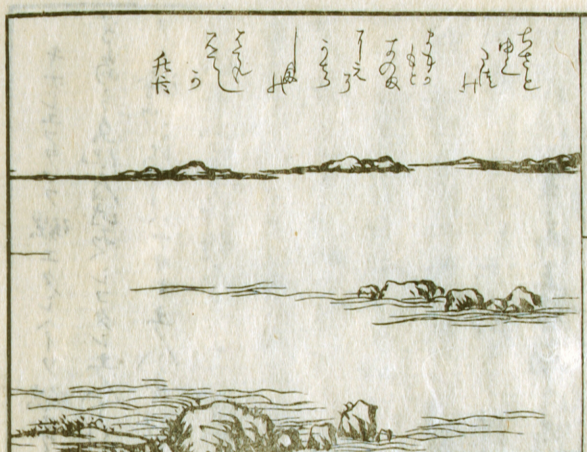
[illegible]

[illegible]

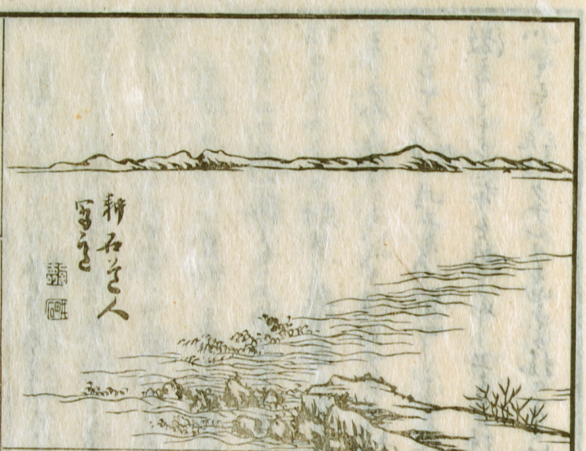
[illegible]

水路あり考ふるに又ホロノツ大岬と云岬の上を越コンブウレムイ
山を越東の海を望む出る所を又ホシノツ岬と云岬の上を越
岩屋板葺オリ山岸に岩屋あり数里を経て演中ヨタノレケ川の中を渡りて坂
の下る標柱にアツケレニ十二ヲ二十六分チョブレ云上る沿海北を中一帯の五石
ウ五尋ありと云しと云ふ〈ホロ子モロ頃あるべし〉演歌東南の
岬を越演ヨツクエ〈小地を背負〉架半〈ヨホサツナイ小港ホロの柳中の流
東へ越ふる山上喰土あるべし〉三丈根本五尋今日及ホ半余
ホロ子モロ高一尋
もゝ〈なまを名つ事始め〉其後ようれい浪のむさきの浦
ハナサキ岩屋板葺見れば東岬あり此所南向東岩岬中チョブレ三尋一帯波荒ホ
高エルリ周一尋モユルリ周一尋を使上二尋ホ見る周り岩屋船泊まる

キナレユラマフ磯エタレ〈イソ磯ホ何を土人小歌の演唱〉
ヲ高ふる文化度山あるレコタン土人を引取演様をもを〈今ホれと呼ホニ
ヲイ元金所る物一ハナサキ土人〈ホ〉ホ〈ホ〉ホ〈ホ〉ホ



ウ沼細く歩く沼の岐ラン子トウベツ沼上
る沼有トベマイ沼見ヨ二カカ
ヌ沼ヨリ岬トトモシリウレシ岬ヌ
トモシリ大周ナリ浦ヌ岐ニ
ヌトツフモシリの紅ヌ
山ヌ風強ク故ニ楊樺ハ枯
匍匐ヌ我ヌ彩ヌ鈎髭ヌ
其名ハ
ポフケセシベ小沼ハ暖温
の沼ヌ故ヌヨケヌベツ小赤楊ヌ川
ヲヒ子ヘツ小レケウシ小山ヌ人



の海ハ上ル故ニ上ル土壁ヌ
陶器ヌ矢根石ヌ如ク
鯨の骨ヌ有リ
乳の骨ヌ
チャレコツ土壁ヌ岬ヌ
上ルヲヤコツ土壁ヌ
イソ子ムシリ
ハボマイムシリ
海ヌ
藤ヌ

二島コロマイモシリ島ニテ周三十カバフケモシリ島ニテ周ハ十カバフケ家ノ被ノ義ナリ
扨此ヲ被ノ風俗ノ度吹倒サレ家ヲ多ク壊ス故ニ此島ノ名ヲ時ノ人二島ト
題ス其ノ高サ六十尋ニ類シ久ク月萬ノ宵ヲ知ルニ云ヘ哭ク思ヒ
霧ノ中ニ茅野ノ原ヲ分ケ行ク知ル神代ノ事ヒトリトエウレシ
トリトエウレシ 稼ヲモフ拘ヲキ人ヲ引ク今ハ苗茅ヲ樹ル一ツノ
テコテトエ、イソ岩茅ノ稼ヲ霞ノ外ノ海ヲ上ル二夜ハ岩ノ根モ両膝ヲ延
ヲ枕ヲ徒ヲ枕ヲ引ク ヌサウレエナヲ見別ハナサキ
ノツレヤブ岬 山ノ高サ 岩孫海中ニ聳ル出ル殺ノ白波ヲ
激ヲ立ヲ布ヲ礼ヲ如ク上ヲ岸ヲ辺ヲ見ル火ヲ上ケ高ノ時ヲ人ヲ
小ヲ出ヲ元十二クナシリ島ヲ孫ノ百ヲ横ノ翼ノ方ヲ向ヒ

ヲ、トキ周ナ岩礁ノ多ク海ヲ モンモシリ周四ヲ ヨヲ ヲ アキロ、周四
ヲ ユウル周ヲ ハルカルモシリ周六 周ヲ 四モシリカ周ヲ
ヲ イタレベイツ周ヲ 水獺ヲ 犬ヲ猴ヲ猟ヲ 従是
岬ヲ山陽門ヲクナシリ、エトロフ子モロ行ノ毋ヲ
スイレヤウ周ヲ 至ル磯ノ義鳥ノ獣ヲ 周ヲ 小ヲ
ヲ レボツ周ハ レベヲツ 鮭ヲ ノ義ヲ 小沼ヲ
船ヲ 宮ヲ 宮ヲ タラク周六 字名マクイ ヲ 沼ヲ
ノ 高ヲ 岩礁ノ清ノ故ヲ 共ヲ 樹ヲ
レコタン周ヲ 極ヲ所ヲ 見ル東ノ異ノ 法ヲ 岩壁ノ岩
ノ ヲ ヲ 極ヲ山ヲ 地ヲ 悪ヲ 周ヲ 小ヲ 船ヲ 粉ヲ

西マイ小アナマ
トヤカウト文化度ニ番屋漁場人夫ニ為リ今ハ廢シ
ヲ人夫ニ於ル二
ヲ家エトロヲ船ヲ晴アナマトヲ船ヲ空ル二日程常ヲ
ヲ東数ヲ尊敬
軍神海嘯ヲ外難ヲ通ヲ
軍神海嘯ヲ外難ヲ通ヲ
軍神海嘯ヲ外難ヲ通ヲ

飯を炊き終りて朝辛きを喫し湯をすゝめ茶を飲うて
沿岸見物するに深さサキヘンベツ方レベンベツ左
ベツは雑草又沿岸切り深小見物を居て面を見合せ
明日出きる夜の一夜も神のみの海くてやあれのこらせれく
中くびき神のみの里に来られて蒙うる夜出かくるせん
昔小見浦を飯を炊くて岩を見て湘南と伝へ主れ新伝
今明日飯を炊きて〇さ〇却て チャレコツ城下コンブウレムイ 小湾ヨベ
男子ウレ小は不苦人家有り時機早渾沌ゆゑ出ずとはなるべく
出ずとも深き故に元彼身を附て基出行悪きる故に欲の葉を殺る酸
操葉を勝る徒ひらふ兵を為と称しわ飯を附を四百人ほど 數株

維章維苦嘗舌嘗來
乃獲異卉味美於回
衆救饑餓其功佛哉
褚鞭上草彼何人斯

甕江川田剛題

敬齋精義書 印

も髪を乱れ被れる花掛帯を山葵を肩脇に煙の板を脇に
書化物の如しと土人笑ひ嘲り自ら此の記念に成るとて冊のもの自書
させしに子孫に伝へ家の宝にすべしと云ふ
ヨリは板ヨリ円く広く板も空に成間候も渇きなること心附き佐の國名
刈名ろうくろの名とは席村の藤を取て皮を剥き皆又糠と接て漬て
食を思ひ出し山に山田寺まで行て見て是を折て喰ふに頗る後味
まさ酸味有て渇を清し土人も此藤の如きを喰ふ事なし始て
知るものへり此藤をクツタラアマと云酸模をシユナバアマと云て飯炊き
し余り多張コツ出たるものなり土人も如此の驗窮して荏の実
抽成し何にも糧と用ゆるに依て荏をアマ、チカブ飯島とて
ナヤレコツ

抽成し土墨に荏の土器をこしらへホキ小沢臓腑の下に云ふ成るを何故
と問ふに土人ノツカマフ小岬方の云ふ此方人数多有りて寛
政九の時分今の子モロの祖父の子モロ土人と云ノツカマフ土人と古帳面
に記しかるに日下部氏の演形未詳ノツカヨマフノツ小と云てイレヤウ二番山名
磯部敏吉くシキムイ小湾漁夫の長者上ノ長者ノ長者ノ長者
附飯を炊て食ふビウナヤラセ小流川故吉くコロクニウレムイ小欲を
あきらめの式ホンコダン村ヨンチコダン村大村小村の式前カサチカ
シユマ小島に成ち笠を被る故吉くこの島沖中位に突出し沙平の時に
の上を乗越別越て行く是を乗越をシユマリウカ島と云て岩根の式
此を乗越に人住て居る所の祖父くまの魚の鮫の如き物の間に

神著
モイハシエイとゝ云て皮を剥て白くして内かゝて見て越て鋒芒繽目須臾
のうち空成て木の如く土人の語に是を岩はら翅と沙箸生于海岸春吐苗其
心若骨白而且動可爲酒籌凡欲採者輕步向前及手拔之不然聞行
者聲遽入沙中堀尋之終不可得也嶺表錄異
入物の如く是を亡羊亡牛先は百品考中に沙箸嶺表錄異越王竹南方艸木狀越
王筯竹竹譜詳錄沙筯福建通志塗釵同字の不を擧て寄識と云て是此
地に有る時に岩はらを見て揺て波に沈ひ浮ぶ物なり
此品の名を呼て此笠と角れと毒蛇に又鏃に刺て頸
痛を治すとも云てホロシユナハウシ小唐シユナハウシムイ小唐其
根を煎て子ペトルに小ピンケウシムイ小唐崖唐義此岬に蛇毒有

只に子モロ唐に入る演紀西南波沙に棒殺チヤイフンテカヲムイ大唐是は
極毒表唐義を子モロへ小此唐に演唐義ピンウシヤムイ前る
ホロモシリ海上に有り周九丁今大島に入り上る所矢・社有る南方船繫泊する
子モロ會所に出先に船を繫て酒を呑酒肴は海鮮の多れを所
如と別に其所に伊賀殺多く有り土人に金所より是に出る殺
を乞ひて見る木綿を織き又方二間に前長陳平宅に到る土人ドン
ドンと云を呼此唐は戎狄と云て蘭人是を見しに二間の石に樽の
酒を與に樽を好きと見サイナ〳〵戎狄ヨミサイナと雜に是テンキを烏
帽子に冠る金の刺繍を見る殺に入れ是を繕に樽に平敷を敷て鈴羊
肩に乗て狄の樽に所に仕狄に鈴羊を樽に舟盛場に有

[illegible]

納紡市日誌

竹潭喜多野氏志古覃日記

壬戌臘月余與塾生日課記事一則。一日見喜多野省吾國字志古覃紀行於几上。乃翻譯以示諸子。使其取法焉云。毅堂學人宣識

志古覃。夷言極處村也。以其在蝦夷極東海中。故名。先是松前侯移土人于根室港之花碕。為空島數十年。今茲安政丙辰。余祗役在悪消。秋七月得報差巡視焉。蓋 官欲再置漁戸也。初四日抵根室。艤舟。酋長烏啞差比原志古覃人。乃命引導。

初五日平明西南風開帆。用夷禮立木幣于鷁首。禱海路安

全。已時歷納紗布岬。東踔四里。抵水晶島。重霧四塞。咫尺不辯。乃鎖船巖間。登岸。檢時規。僅過午。

初六日用寅卯針揚帆。雲霧忽駁忽合。變態無極。抵悉勒通島之登根別恩。崖上有赤有白有紺有黑。斑爛作縝紋。差午出大洋。南風大作。船傾側簸蕩。衆皆眩暈。嘔噦狼藉。倚舷而望。四面浩淼。無恩嶼可泊。萍飄迷轉。一任其所之。忽見一島千艮位。轉柁赴之。巨巖盤薄于頹波怒濤之間。傍多礁石。一誤則船粉碎矣。衆相顧失色。入夜風少定。展帆東馳。初更達多羅久島。繫舟登岸。濕霧如雨。燭火屢滅。乃燒枯枝敗葉取明。

初七日平且與松岡德松村精。巡視島中。無大樹。岸皆巉嵒。往々帶青綠色。光瑩如孔雀石然。

初八日暴雨驟至。避于巖穴。寒甚。御綿衣。舟中水且盡。派人覓泉。不得。乃掘地出水。煤色。以巾漉之。有臭氣。

初九日微雨。銃海獺長丈餘。未及收。飛濤大至。忽盪去。可惜。

際昏德獲鵞一隻而歸。

初十日颶風夜半收。怒纖月在空。明日天氣可知。

十一日開霽解纜。南風側帆東踔。望洋面一白如雪。俄頃潮來。其鳴如雷。其疾如馬。狂吼奔騰。襄駕蓬脊。蓬雷如瀑。船傾欹將危。舟人惶怠失措。德曰潮急如此。請一還于多羅久候

順風。余曰何日無潮且海路既過半今而回帆是廢前功也舟人奮激竭死力劣能過之日晡始見志古覃島之佐喜宇遠別㠯樹木可辯既到㠯口濤高不可得通傍島南入阿摩麻比灣拋錨岸石磊礧皆欲動諦視則水豹群聚也其啼如赤子又多鱉手獲百餘尾。

十二日出灣過麻宇多阿比羅烏皮流諸岬此間平岡漫嶺無大樹抵佐喜宇遠別島形一變峯巒突起瀕海怪石攢簇或蹲如虎或睨如獅子或聳如豺狼或如人立或如渴牛怒猊或如鶴啄鵲落龜伏蛇盤千狀萬態不能盡述轉入敏寧志豫灣一山皆鳳尾松懸泉數條隱見樹間白光閃〻奪人目鸛鵰海鷺等見人驚起回翔空中不知幾千數歷遠羅勘遍泊阿奈麻力灣。

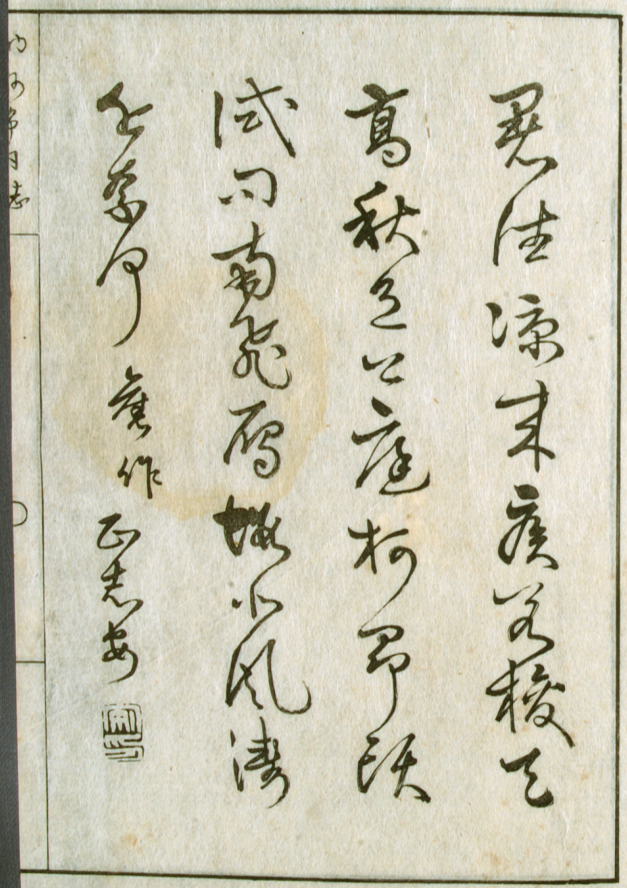
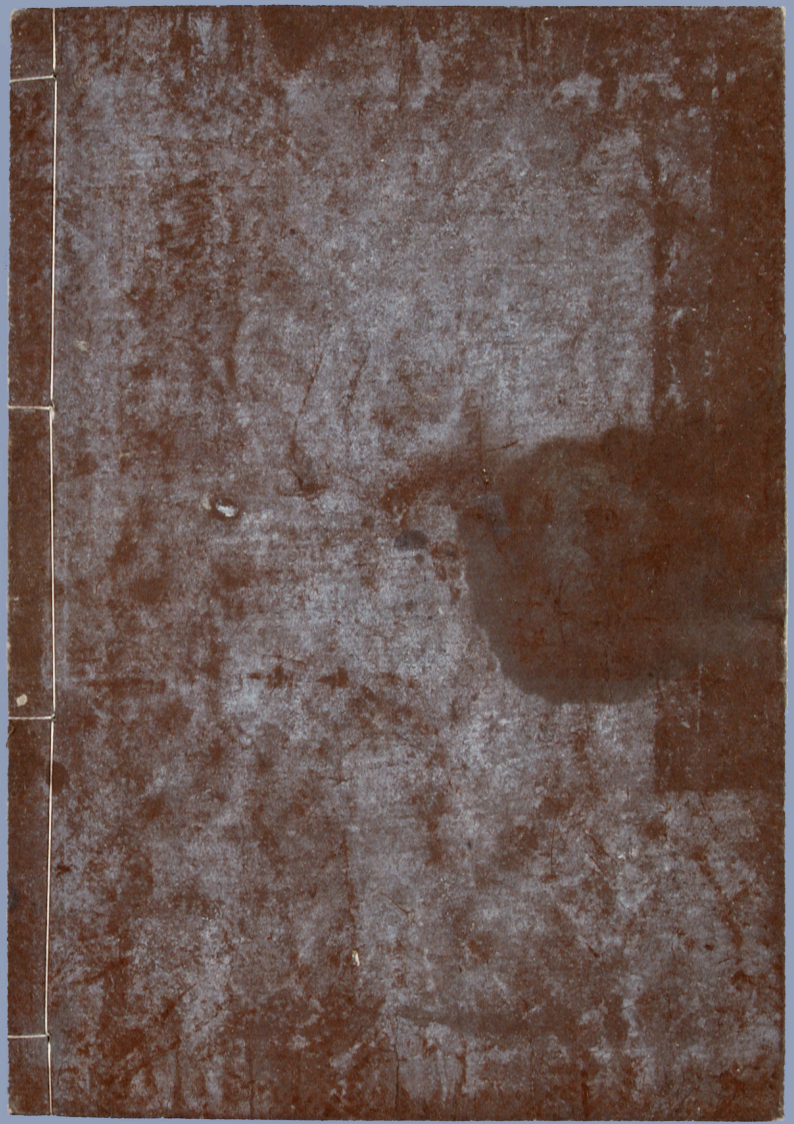
十二日弗旦傍島北歷麻多古覃夷言冬村也抵射古覃夷言夏村也舍舟登陸有草類燈心艸細毳密布如鋪青氍多古墳涵酒祭之文化中有太郎者以勇力畏服土人自立為酋長更有并吞根室惡消之意惡消酋長伊古登比有膽畧欲除之乘小舟來直過其盧太郎素相識具酒饗之伊古登比始入室揷匕首于簷端酒既酣急起執匕首刺之死覺云

十四日平明巡視有聲震地如大砲連發衆驚以為洋船進㠯令人見之山崖崩數十丈矣大樹皆合抱撑天蔽日其下

敗葉重疊行葉上不知穴隆一失足幾墜深谷饒狐與他種
異異面短身羸其毛或黄赤或黑白有二色者有三色者純
黑者映日為金色尤美夷人與滿洲人交易以此為上貨王
士慎池北偶談云玄狐惟王侯以上始得服則其貴可知矣
十五日發射古覃歷度加理宇多知呂毛志利惠麻葉古通
計久伊保泊古覃計志奥是為島南邊較北邊覺少暖是夜
有火熒〻起海中散作數百星如近如遠至曉滅或云大魚
目或云鹽精未知孰是
十六日歷登伊度古麻〻比還佐喜宇遠別奥周廻凡三十
四里大小二十四灣皆可泊可漁事既竣約明日回帆

十七日揚帆向西回視志姑覃既没高濤間
十八日早船在多羅久島東北五里便風駕駛儇甚
十九日開霽覩日出海水俱紅未時風恬波平船膠滯不前
黄昏便風復作挂帆三分西馳
廿日船為潮所流十里許差午風轉東南舟人忽報曰距根
室僅三里矣舉舟懽抃食頃入港此役海路嶮惡將葬魚腹
者屢矣而同行十數人無一損失豈非天幸乎歷程往還凡
百四里歷日凡十有六
隨境記實似易而難架空矣筆似難而易何也矣筆者
可以逞巧而記實者動輙流平凡況他人所記我從而

譯之。華〻顧原文。一字不可移動。則其難可知。而此篇行文流暢。絶無拘束態。可謂能手矣。五代史四夷傳有錄客話以成一篇好文章者。此篇或庶幾焉。

癸亥人日川田剛妄評

2805
桂亭